

石牟礼道子と近代

岩岡中正（熊本大学）

昨年出版した拙著『ロマン主義から石牟礼道子へ』（木鐸社）は、1968 年を起点とする世界史的な脱近代パラダイム転換について、その源流であるロマン主義およびその今日的表現である石牟礼道子の思想における、近代批判と共同性の回復の視点から論じたものである。これを踏まえ本報告では、とくに石牟礼における認識と表現に問題を絞って、近代の認識や思考の特徴である二元論を、石牟礼がどう乗り越えて新しい脱近代の認識や知の再生を目指したかを、その作品と表現を通して考えたい。

（1）認識における和解・・・『苦海浄土』その他の作品を通して、近代の自我中心の主客二元論的認識とその世界像をどう克服し、全体の一部である自我が、全体をどう認識して描きうるかという、石牟礼文学の試みについて考える。

（2）身体による自我と世界の和解・・・身体という、「人間に残された最後の自然」を通して、石牟礼が自我と世界をどう和解させようとしたか、つまり石牟礼における身体性の問題について、能「不知火」などを通して考える。

（3）存在の和解・・・自我と他者の対立を超えて、存在するものが和解し、すべてが存在の意味のあるものとして存在する、石牟礼の有機的世界像について、『天湖』ほかを通して考える。

（4）想像力や神話による時間（歴史）の和解・・・さらに、想像力や神話によって、近代の線形の時間観や進歩史観を超える、石牟礼の時間観や歴史意識の発生について考える。

これらはいずれも、産業革命などに対してロマン主義が、また水俣病の中に石牟礼が見た、近代の災禍であり危機であった。ここから、たとえば基層民たちの古くて新しい知や規範が想起されるのだが、最後に、石牟礼がこの「近代」の両義性についてどう考えたか、つまり「近代」に対する石牟礼のスタンスについて考えてみたい。